

イランが中心の世界がくるかも知れない

いまイランが注目を浴びる歴史的背景

鈴木頌

2026 年 9 月 1 日

1, 600 年ぶりにヨーロッパがヨーロッパ以外の国に敗れた

- * 今から 600 年前、オスマン・トルコがコンスタンチノーブルを制圧し、ヨーロッパは戦々恐々とした。
- * 東への交易路を絶たれたヨーロッパはアフリカ大陸を大回りする迂回路を開拓する他なかった。その結果、ヨーロッパでも辺縁に属するイベリア半島が世界の覇者になり、ついで最大の市場主だった英仏が海外進出するに及んで、世界の覇権を手中に収めた。
- * ヨーロッパの支配する 500 年は、暴力支配の時代であり、金権主義の時代であり、人種差別の時代であった。一言で言えば「ヨーロッパ植民地帝国」の時代であった。
- * 名誉白人で有り続けた日本はどう受け止めるのか？

2, 最大のエネルギー資源が先進国から失われる

- * 石油資源を握っているのは石油メジャーである。OPEC（石油輸出国機構）は価格決定に関わるがそれ以外はメジャーが掌握している。それは「資本力と政治力で石油の探鉱（採掘）・生産・輸送・精製・販売までの全段階を垂直統合で行い、シェアの大部分を寡占する石油系巨大企業複合体」（Wiki）である。
- * 石油支配の最大の根拠地は中東であり、最大の裏付けは米国による軍事支配（とイスラエルの軍事脅迫）であったが、これらの軍事力の優位性が失われつつある。

＊ 膨大な原油売上はドルで決済されており、これが国際通貨としてのドルの力の裏付けであったが、この裏付けが失われるかもしれない。

3, 「ヨーロッパ植民地帝国」の最後の砦がなくなる

＊ 欧米列強の互いの戦いは、二度の大戦をもってひとまず終了した。その後の民族解放の戦いは諸国の独立をもって完了した。しかし、強大な軍事力と、圧倒的な経済力による、形を変えた植民地支配はむしろ強まっている。

＊ 米国の軍事干渉は世界で均一に発生しているのではなく、明らかに中東に集中している。曲がりなりにも共和制のアラブ民族主義国家を攻撃し、その多くを破壊した。族長にミニ国家の支配を委ね、イランを包囲する基地群を配置している。民主主義がいずれの側にあるかは火を見るより明らかだ。

＊ イスラエルは一連の戦闘において、中世ヨーロッパが派遣した十字軍の役割を、もっとも凶暴な形で果たしている。以下の年表を参照されたい

略年表

1948 年	第 1 次中東戦争：米国の強力な支援を受けたイスラエルがアラブ諸国連合軍に勝利
1953 年	イランの軍事クーデター：新政権が石油の国有化を目指す、米英の共同で打倒される。
1956 年	スエズ動乱：エジプトがスエズ運河を国有化。英仏、イスラエルが軍事侵攻。
1967 年	第 3 次中東戦争：アラブ軍が進攻するも撃退される。イスラエルは西側の攻撃基地と化す。
1973 年	第 4 次中東戦争：アラブ産油国が発した石油戦略は先進国に激しい衝撃をもたらす。
1979 年	イラン革命：米カイライ政権を打倒、当初は統一政府、その後イスラム勢力が権力を獲得。
1980 年	イラン＝イラク戦争：米国の意を受けたイラクが侵攻、8 年後にイランが勝利。

- 1982 年 レバノン戦争：イスラエルが侵攻、PLO を追放。右派政権支援を名目に米海兵隊が介入。
- 1991 年 第一次イラク戦争：フセインがクエートは自領と主張し侵攻。多国籍軍の反攻を受け撤退。
- 1993 年 オスロ合意：米国の介入により暫定自治協定（二国案）で合意。イスラエルは無視。
- 2003 年 第二次イラク戦争：大量破壊兵器の隠匿疑いで、国連を無視して米軍が侵攻。
- 2006 年 南レバノン侵攻作戦：イスラエル軍がレバノン侵入。ヒズボラの抵抗で撤退を迫られる。
- 2023 年 ガザ蜂起。ハマスが立てこもる
- 2024 年 イラン戦争が事実上の開戦。イスラエルが越境攻撃、イランもロケット+ドローン攻撃で応酬

＊ 以降は各々の文献を参照されたいが、中東に関するさまざまな年表は共通した欠陥を持つ。それはアメリカ帝国主義と中東諸国人民の相克を中心に置く視点が欠けていることである。地図を見ながら語る必要がある。

3, 「中東」の地理学的把握



衛星地図より

＊ 最近では中東ではなく西アジアと呼ぶべきだとの説もある。

中東はヨーロッパから近いアジアという意味だ。トルコのことを小アジア（半島）というのもおなじ欧州中心主義の発想だ。であれば、日本を極東と蔑称するように、ヨーロッパを極西と言ってもよいだろう。